

暮らしの中の生きものたち

鶇

このコーナーでは、身近で馴染み深い生きものたちを、紹介していきます。

冬鳥のシロハラやアオジの声もきこえるなか、森で一番大きく響いてくるのはヒヨドリの鳴き声です。留鳥とされるように年中見られますが、日本列島内の渡りが確認されています。

冬に京都にやってきている個体群は、北国に繁殖地を持つものかもしれません。北の地方のヒヨドリは南のものより翼が長いといわれます。北海道の南端から津軽海峡に飛び出した群れが高度を下げて波の上スレスレを飛ぶ様子はテレビでも放送されました。低空飛行の理由は、天敵であるハヤブサの攻撃をかかわすこと。さすがの猛禽も海を恐れて急降下のスピードを緩めるだけでなく、上空や高い岸壁からはヒヨドリの背の灰色と海水面の色が重なって姿を捉えにくいようです。二千羽以上という海峡越えの群れは、本州に着くと森を梯子して羽を休めながら、少しずつ分散していきます。

西日本や九州で繁殖するものも、冬は、より南へ移動するようですが、どこかのヒヨドリがどこまで渡るのか、まだよくわかっていません。スズメやカラスがいない島でも見られ、日本では最も広い分布域を持つ野鳥でありながら、日本列島を中心とした地域に生息が限られているというのも乙なことです。

短足、地味、胸から腹にかけての「花散る」ような模様、甘いもの好き、卑しんぼ（「鶇」の字にぴったり）と、どこか日本人っぽい特徴も持ちますが、スマートな体つき、警戒時に立てる頭の冠羽、長い嘴などには風格を感じます。

子育て中の春から夏にはオスもメスも狩りにでかけます。イモムシを捕まえたり、梢にとまっては飛んで、を繰り返しながら羽虫を狙ったり、カマキリやセミ、ときにはヤモリもつまんだり、なかなかのハンター振りです。そして、晩秋、木の実が熟す頃には虫なども減り、狩猟中心から採集中心へ転向してお目当てを変えます。実を探して一帯に目を光らせ、情報交換もしながら沢山の液果を呑み込み、タネを糞で出したり、口からペリットで捨てたり。それらは森のタネまきになります。また、舌の先はブラシ状をしていて、吸蜜のためにサクラ類やツバキ類の花によく訪れます（メジロも同じ）。受粉を手伝ってもらおうとヤブツバキが赤く咲いて鳥を呼び、蜜をごちそうになったヒヨドリが顔に黄色い花粉を付けているのは、冬の愉快的な風景です。

卑しんぼのヒヨドリは外来種や園芸種への順応も早く、尖った嘴で柿や柑橘類、甘い葉菜などもつつくため、畑や果樹園の困りものとして、狩猟鳥リストにまで入れられました。

けれども、この食欲こそ、襲われて失敗しても何度も挑む子育てを支えているのかもしれません。その度に巣作りにもいそしむのでしょう。使い終わった巣を森の子クラブで調べたところ、マツの落ち葉で産座（卵が直接接触れるところ）を組み、シュロ、樹皮、ササ、草などを化学繊維も加えながら編んで、外側にシダの葉をあしらったつくりでした。

そのエネルギッシュな暮らしぶり、これから百年も千年も森にタネをまき続けて欲しいものです。



頬の茶色い模様が目立つ
(森のセンターの近くにて)



津軽海峡の海面を渡る群れ
HPダーウィンが来た！
ダーウィン図書館より転載



分解したヒヨドリの巣
森のセンターギャラリーにて展示中